

唐代における「小説」の変容について

黒田 真美子

従来、小説研究の方法として次の二種が採られてきた。一つは、「小説」という語に則して当時の概念を研究することとで、他の一つは、現代の小説概念に近い資料や作品を選んで研究することである。⁽¹⁾ 後者の方法も、未だ十全な議論が尽されたとは言い難いが、個別の作品論を数に入れば、それなりの成果を認められよう。だが、前者の観点からの研究は、魯迅『中国小説史略』以来、『莊子』の初出例に始まって、見るべきものは、『漢書』芸文志の「小説家」をめぐる研究に止まっている。時代的にそれを継ぐべき六朝時代における「小説」概念の追求は、富永一登「六朝『小説』考——殷芸『小説』を中心として——」（『中国中世文学研究』11 一九七六年九月）がまとめた唯一のものであり、唐代に至っては、殆んど無いという状況である。本稿は、この空白をいささかなりと埋めようという試みである。

一 唐初—天宝における三資料

唐代において、最初に「小説」の語が見出されるのは、顯慶元年（六五五）に成立した『隋書』経籍志である。目録学上、初めて確立された四部分類の子部に小説家が収められている。この小序は、「小説」を次のように記している。

小説とは、街説巷語の説なり。伝は輿人の誦を載せ、詩は芻蕘に詢ふを美とす。⁽²⁾（中略）道聽塗説、畢く紀さざるは靡し。⁽³⁾（中略）孔子曰く、小道と雖も、必ず観る可き者有り、遠きを致さんには泥まんことを恐るゝと。

これは、ほぼ『漢書』芸文志の定義を踏襲している。ただ、子部の後序に「儒道小説は、聖人の教へなり、而れども偏する所有り」と述べている点など、『漢書』よりも、その評価を幾分明確にしているといえよう。

この小説家には二十五種の書物が著録され、それ以外に梁時代まで存している『隋書』編纂当時亡佚してしまった六種も注記されている⁽⁴⁾。以下に、著録された書名と『旧唐書』経籍志、『新唐書』芸文志における著録状況及び現在の状況を列記する。

通し 番号	『隋書』経籍志	『旧唐書』経籍志	『新唐書』芸文志	現在の状況
1	燕丹子一卷	三卷	一卷	存。中華書局、一九八五・一刊 『鉤沈』三条
(2)	青史子一卷	なし	なし	佚
(3)	宋玉子一卷	なし	なし	佚
(4)	録一卷	なし	なし	佚
(5)	羣英論一卷	なし	なし	佚
(6)	語林十卷	なし	なし	『鉤沈』百八十条 殷芸『小説』収一条
7	雜語五卷	なし	五卷	『鉤沈』八四条
8	郭子三卷	三卷	賈泉注郭子三卷	佚
9	雜対語三卷	なし	なし	佚
10	要用語対四卷	なし	なし	佚
11	文対三卷	なし	なし	佚
12	瑣語一卷	なし	なし	佚
13	笑林三卷	三卷	三卷	『鉤沈』二九条

14	笑苑四卷	なし	なし	佚
15	解頤二卷	なし	なし	佚
16	世説八卷 (劉義慶撰)	八卷	八卷	正文書局、一九七六・八 刊
17	世説十卷 (劉孝標注)	続世説十卷	続世説十卷	同右
18	俗説一卷	なし	なし	佚(『鉤沈』五二条は、沈約の佚文)
19	小説十卷 (殷芸撰)	十卷	十卷	存、上海古籍、一九八四・四 刊
20	小説五卷	なし	なし	佚
21	邇説一卷	なし	なし	佚
22	弁林二十卷 (蕭賁撰)	二十卷	二十卷	佚
23	弁林二卷 (席希秀撰)	なし	なし	佚
24	瓊林七卷	なし	なし	佚
25	古今芸術二十卷	雑芸術類 (今古術芸十五卷)	雑芸術類 (今古術芸十五卷)	佚
26	雑書鈔十三卷	なし	なし	佚
27	座右方八卷	三卷	三卷	佚
28	座右法一卷	なし	なし	佚
29	魯史欵器図一卷	儒家類	儒家類	佚
30	器準図三卷	なし	曆算類	佚
31	水飾一卷	なし	なし	『鉤沈』

○通し番号()は付注の書名。

○撰者名は、同じ書名の場合のみ記した。

○『鉤沈』は魯迅『古小説鉤沈』の略。

○「存」は現代の単行の書に限って出版社と発行年月を記した。

唐代における「小説」の変容について

右のように部分的にでも現在見ることの可能な書物と、それ以外は、書名や、清の姚振宗の『隋書経籍志考証』(『五史補編』所収)などを参考にして内容を推定できるものに限って整理すると、次の四分類にまとめられる。

まず、16 17世説を初めとして24瓊林に至る一群であり、これらは当時の有名人の言行録である。他に、残存作から類推して、(4)録、(6)語林、7雑語、8郭子もこの一群と考えられよう。これらは「街説巷語」に一番近い群であり、量的にも小説家類の中心的存在といえよう。もつとも、長孫無忌等⁽⁵⁾、経籍志編纂者の、雑多な要素をひとまとめに小説家に入れるという小説観は否定できないが、そのほか「対」の字を書名の一字にしている9 10 11の三種も、恐らく「言語応対」⁽⁶⁾の書で、この群に入れてよいと思われるが、断定し得ない。

右の一群に属させてもよいが、笑いを共通項として指摘し得る13笑林、14笑苑、15解頤を別に第二群とする。

次は、25古今芸術から最後の31までの一群である。25は『旧唐書』では雑芸術類に著録されている。『旧唐書』経籍志の前身である毋𦉰⁽⁷⁾の『古今書録』においても同様と思われるので、『隋志』成立後、百年足らずには、小説家の枠から分離独立していった一群である。したがってこの当時においても小説家の中核的存在とはみなし得ないであろう。

第四群は、歴史に関わると思われる1燕丹子、(2)青史子である。(2)は『漢志』にも著録され「古の史官の記事」という注からも、史書との関連を認め得よう。1の『燕丹子』はいうまでもなく刺客荆軻の秦王暗殺未遂事件を記しており、本来なら史部雑伝類に入るべき書物である。編纂者は何故そうしなかったのかを以下に考察したい。

この書は成立年代からして諸説紛々の著作であるが、今その点には深入りせず、『史記』刺客列伝との比較を簡単に見たい。両書は書き出し部分から異なっている。『史記』は荆軻の履歴という列伝の体裁に則って始めるが、『燕丹子』は、人質となった燕の太子丹が秦王に冷遇された結果、帰国を願う所から始まる。この記述は『史記』にも見えるが、『史記』ではそれに次いで、ただ「丹怨みて亡げ帰る」とだけ記す。一方、『燕丹子』では、秦王が、「鳥をして白頭な

らしめ、馬をして角を生ぜしむれば、乃ち許す可きのみ。」と難題をふっかけたり、帰路を妨害したことが記され、やっとの思いで丹は帰国し、「深く秦を怨み、(中略)勇士を奉養して、至らざる所無し」と続く。つまり、丹が報復の意を抱くに至る心理的プロセスが『史記』よりも鮮明に伝わってくる。この場面に限らず『燕丹子』の方が、話にふくみがあり、登場人物の形象化においても、『史記』より鮮やかな印象を与えている。編纂者が史部に入れなかった理由として、富永氏は、司馬遷が論贊で、「馬、角を生ず」などの異事を「太だ過てり」と批判したからとされる(前掲論文)が、それだけではあるまい。やはりこの書に描かれている生き生きした人間像と虚構性が史部にふさわしくなかったからではないだろうか。つまり、『隋書』編纂者の小説概念として、その中心を有名人の言行録が占め、その他雑多な要素も含まれるが、虚構性と関わる要素も見出し得るといえよう。

また、『漢書』芸文志と比べて明らかなのは、歴史に関わる書物がこの1(2)の二書のみが減っていることである。これは、いうまでもなく目錄学上初めて史部が独立したことに起因しよう。この独立は、やはり、「史学其れ自体が学問として独立し経学と並び存する事となった」のであり、「充分唐代初期に於ける史学の盛を認めなければなるまい。」(金井之忠『唐代の史学思想』弘文堂、一九四〇・二)。このように、唐代前期の学問文化状況として史学の隆盛とその影響力を考慮すべきであろう。

このことは、所謂志怪書を考える時、特に意味を持つてくる。『隋書』経籍志に先んじて史学が一応の独立を果しているのは、梁の阮孝緒の『七録』であるが、志怪書は、『隋志』の史部に当る記伝録の鬼神類に収められていた。それは『隋志』においても受け継がれ、志怪書は史部雑伝類に著録されている。もっとも『七録』の鬼神類は廃止され、六朝期の人々が「怪異の記録にきわめて真剣に相い対していた」意識は、「風化していつてしまった」⁽¹⁰⁾と見做すべきであろう。そして『隋志』雑伝類の小序において、

魏の文帝又た列異を作り、以て鬼物奇怪の事を序ぶ。(中略)其の事類に因りて、相繼ぎて作る者甚だ衆く、名目転た広がり、而して又た雑ふるに虚誕怪妄の説を以てす。其の本源を推すに、蓋し亦た史官の末事ならん。

と記されているように、怪異を記す作品の増大によって、その中に事実とは見做せない「虚誕怪妄の説」が混入するようになってきたことを指摘する。「虚誕怪妄の説」をそのまま虚構と結びつけるのは浅慮の譏りを免れ難いが、ここに、いわゆる志怪書に対して、事実か否かを問題にする姿勢が生まれていることは認められよう。この志怪書と「史」との関わりを、視点の一つとして、後にも追求していきたい。

『隋志』に次いで「小説」の語が見えるのは、劉知幾『史通』(四部叢刊所収)である。この書は、『隋志』から五十年余り後の景龍四年(七一〇)に成っている。この内篇「雜述」に「小説」の語が二箇所に見える。最初は書き出しの部分である。古より三墳五典などの書が歴代伝えられ、一つの規範と考えられてきたが、その他の「外伝」として『本草』・『孔子』家語などの書があると記してから、次のようにまとめる。

是れ偏記の小説、自ら一家を成し、而して能く正史と参行し、其の従りて来る所尚しきを知る。

この「偏記」とは、『隋志』小説家類の「而れども偏する所有り」という語を踏まえており、「小説」の修飾語の役割を果している。その「偏記の小説」が「自ら一家を成す」とは『隋志』の小説家類同様、「外伝」の諸作が小説家として一つにまとめられることを意味していよう。

次いで、「史氏の流別、途を殊にし驚を并ぶ」と述べて、その流れを十種に分類するが、その四番目の「瑣言」と称するグループの解説に「小説」の語が見える。

街談巷議、時に観る可き有り、小説の言為る、猶ほ已むに賢れるがごとし。故に好事の君子、諸を棄つる所無きか。そして、ここに属する書物として、『世説』『語林』『語録』⁽¹¹⁾『談藪』⁽¹²⁾の四種を挙げている。これらの解説文も書名

も、『隋志』と何ら相違無い。だが、『隋志』と決定的に異なる点は、この「小説」(瑣語)は「史氏の流れ」の一つとして捉えられていることである。『史通』は、中国最初の歴史理論書と位置づけられ、前述の史学の成立と隆盛を物語る著述である。そうした学問状況の中で、『漢志』以来諸子のその他扱いされてきた「小説」が、『史通』に及んでは、正史のその他と見做されるのである。

もう一点、述べるべきは、十分類の八番目に挙げられた「雜記」なるグループに、『搜神記』を初めとする志怪書が収められていることである。劉知幾は、それらの書の功過を次のように述べる。

雜記とは、若し神仙の道を論ずれば、則ち服食し氣を煉り、以て寿を益し年を延ばす可し。魑魅の途を語れば、則ち善に福し淫に禍し、以て惡を懲らし善を勧む、斯れ則ち可なり。謬れる者、之を為すに及べば、則ち苟くも怪異を談じ、務めて妖邪を述べ、諸を弘益に求むるも、其の義、取る無からん。

ここでは、いわゆる志怪を論じ語ることに、現実的利益を認めるが、「妖邪」を述べることには難色を示している。これは、『隋志』編纂者とはほぼ同様の見解といえよう。

時代的に『史通』の次に「小説」の語が見えるのは、劉知幾の次男劉餗の『隋唐嘉話』である。この書の成立時期は正確には断定し得ないが、劉餗が天宝の初、集賢学士であったこと(『全唐文』卷三七八)、序文に名が見える友人の趙良玉も、履歴を調べると天宝年間の官職のみ記されていること、この書の記述中、最も遅い年月は、開元二十年(卷下)であることなどから、天宝の初め頃と推定しておく。この序文には、次のように「小説」の語が見える。

余、髫髻の年より、便ち往説を聞くこと多し。之を大典に備ふるに足らず、故に之を小説の末に繋ぐ。ここにおける「小説」は、「大典」の対語として、片々たる小さな叙述形式を意味している。

この『隋唐嘉話』は、『国朝伝記』『国史異纂』『小説』などの異名を持っている。⁽¹⁴⁾これらの書名からも、また劉餗の

史官の家系からも明らかなように、この書が、史書を意識して国史を補うために編まれたことは疑いあるまい。それは、序文の最後に次のように記すことから伺われよう。

釈教は報応の理を推す、余嘗に存して論ぜず。解奉先の事の若きは、何ぞ其れ明著ならんや。友人天水の趙良玉、睹て余に告ぐ、故に書して以て異を記す。

「解奉先の事」とは、画工解奉先が、描き賃を先に受け取って、注文の壁像を未完成のまま逃げてしまいが、捕えられると、もらった額の分はもう描き終ったと言い「若し心に負けば、願はくば死して汝の家そむの牛と為らん」と誓ったところ、その通りになってしまったという異事（巻下）である。劉餗は、友人がこれを実際に見て真実と認められるので採録したと一言する。これはやはり、真実へのこだわりであり、『隋志』以来の、異事に対する事実か否かという史的視点の継承と考えられるのである。

このように『隋唐嘉話』は、「小説」という形式によって、事実と認め得る事柄を選び記し、正史を補うために編まれた書といえよう。つまり、ここにおける「小説」とは、片片たる史実を記す際の一形式と捉えられるのである。

この形式を用いて記された内容は、有名人の言行録が多数を占め、『隋志』において小説家と見做された各書と、ほぼ同様の内容といえる。ただ一つ注目すべきは、後の詩話に繋るような詩や楽府をめぐる話が十四条記されていることである。短いものを引けば次のような文である。

李義府始めて召見せられ、太宗試みに鳥を詠ましむ。其の末句に云ふ、上林 多許の樹あるに 一枝の棲も借さず、と。帝曰く、吾 全樹將て汝に借さん、豈に惟に一枝のみならんや。

『全唐詩』巻頭に九十九首もの詩を収められ、「唐の文皇既に武功を以て隋乱を平ぐ。又た文徳を以て太平を致し、篇詠に於て尤も其の好む所あり。」（『庚溪詩話』巻上）と評される太宗ゆえ、彼に関わる逸話は、おのずと詩に因む話を含

むことになったのであろう。これは、当時の文学状況の反映であり、「小説」によって記される内容が文学的に多様化していく芽生えといえるのではないだろうか。

二 中唐期に見える変化の兆し

開元天宝年間の栄華があえなく潰え去り、唐帝国が下降への曲線を辿り始めると、その弱体化に乗じて吐蕃が侵入したが、時の天子代宗は、南詔と結んで対抗した。それが実を結びつつあった大暦末に編纂された独孤及の遺文集『毘陵集』（四部叢刊所収）の序文中に「小説」の語が見える。この序文の作者として「虔州刺史、李舟」⁽¹⁶⁾と記名されている。独孤及の卒年は、『毘陵集』の編者梁肅の後序によれば、大暦十二年（七七七）⁽¹⁷⁾であり、同年秋九月、二十巻に編まれたという。

この序は、古文家たちがよく用いる『易』の「人文を觀て、以て天下を化成す」（「賁」）を踏まえて人間に「文」が無ければ礼楽刑政勸誡も有り得ないと述べたあとで次のように記す。

人の賢なる者に在りて、其の大を得るは、礼楽刑政勸誡是なり。不肖なる者、其の細なるを得れば、或いは小説に附会して以て異端を立て、成言を彫斲して以て対句を裨し、或いは近物を志して以て童心を遊び、或いは庸声に順ひて以て俚耳に諧ふ。其の甚だしきは、則ち盛徳を矯誣し、風教を汙穢し、蟲と為り蠹と為り、妖と為り孽と為る。

ここに見える「小説」とは、そして「異端」とは何であろうか。右の文に続いて、この「隳波」を溯って清源に趨いたのは、唯陳子昂のみと記し、陳子昂の後継者として、独孤及を初め、蕭穎士、李華、賈至の名を挙げ、後文では、梁肅の名も記す。すなわち、これらの人々は、韓愈の古文運動の先駆的文人グループである。彼らは、「前期古文家の存

在なくして、韓愈の存在はなかつた⁽¹⁸⁾といわれるほどに、直接、間接に韓愈に大きな影響を与えた。特に、梁肅は、韓愈の科挙の答案を高く評価した採点官であり、若き韓愈が彼の家に遊んだ逸話もある⁽¹⁹⁾。その梁肅に「道德仁義、文に非ざれば明らかならず。礼楽刑政、文に非ざれば立たず。」⁽²⁰⁾（『昆陵集』後序）なる載道文学観が見えるのも偶然ではあるまい。これは、李舟が序文の中で「人の賢なる者に在りて云云」と述べていることと類似している。したがって、李舟の思想的立場は、梁肅、韓愈と同じく正統儒教に基づく古文家に近いと類推し得よう。もしそうならば「異端」とは一体何を指すのであろうか。直ちに想起されるのは、韓愈の「五原」などの釈道批判である。だが、前期古文家の宗教的側面を調べれば、それはたちまち否定される。独孤及は、「道仏の教理に対してかなり深い関心をみせていた⁽²¹⁾」と指摘されているし、梁肅に至っては、天台教学の復興を企てた荆溪湛然の流れを組む出家家として『仏祖統紀』（巻九）に伝が載せられるほどである⁽²²⁾。李華も湛然に兄事している。このように韓愈に先んじる古文家たちは、むしろ釈道に近い立場を取っており、それを「異端」と捉えることは不可能である。ここではやはり、あくまでも正統儒教の道統に沿った載道文学観に則すべきであろう。神田喜一郎氏によると、前期古文家たちは、春秋学において三伝への懷疑を唱えた啖助等新経学派とも深い関わりがあったという⁽²³⁾。沈滞した唐代経学研究にあって唯一評価されるこの新経学と載道文学は互いに連動し、影響しあい、当時の思想界を活性化に導いたのである。このように活発な思潮の中で「異端」と称される言説が出てくるのは当然であろう。それが具体的には何であるか、今の段階では断定し得ないが、一つの立場を明確に主張すれば、それ以外は自ずから異端視されていくだろう。『論語』為政篇の「異端を攻むるは、斯れ害なるのみ」という孔子の語は、当時の諸子百家という空前の思想界の活況から生み出されたものであろう。以上のことから推して、この「異端」という語も、唐代における活発な思潮から生まれ、己の立場を正当化するため「小説」に附会して言説を立てることが行なわれたと考えられる。そうなると「附会小説」とは、己の言説をより効果的にするために、意識的操

作や工夫を加えることを意味している。これまで、質量ともに微々たる史実を叙述する形式として見做されてきた「小説」であるが、そこに「附会」して異論を立てるといことが行われ始めたのである。ここに「小説」が変化していく兆しを表わしていることは、確実に認められよう。折しも、この頃から、沈既済の「任氏伝」「枕中記」などを皮切りに、所謂唐代伝奇が集中的に書かれていったことを考え併せれば、甚だ興味深いものがあるのである。

『毘陵集』の編者梁肅(七五三～七九三)とほぼ同時代の人である柳冕(？～八〇五)の「孟判官の宇文生の史官を評するを論ずるの書に答ふ」(『全唐文』卷五二七)にも、「小説」の語が見える。柳冕は、梁肅と並んで、創作上の成果は少いが、理論的には嚴正だと評される古文家である。⁽²⁶⁾『全唐文』に収められた記述は、「夫れ文章は、教化に本づき、情性に発す。教化に本づくは、堯舜の道なり。情性に発するは、聖人の言なり」(『徐州張尚書、文武を論ずる書に答ふ』)など、いずれも文章の本質を正統的儒学の教化に置く載道文学論を展開している。この返書においても、司馬遷に対して「遷は聖人の道を得ずと雖も、聖人の志を継ぐ。(中略)遷の史、未だ之を継ぐ者有らず、之を命世と謂ふも、亦た宜ならずや」と一応評した後で、次のように批判する。「遷の過ちは、儒教に本づきて一王法を以てせざるに在り」と。そして、繰り返し、聖人の道を知る必要性を説いた上で、最後のまとめの文の中に、「小説」の語を記している。

夫れ大道を言ふ者は、小説を以てすべからず。黄鐘に応ずる者は、末音を以てすべからず。聖人を師とする者は、無法を以てすべからず。

この「言大道者、云云」は、『漢志』『隋志』の小説家の小序に引かれている『論語』子張篇の「雖小道、必有可觀者焉、致遠恐泥、是以君子不爲也。」の語を踏まえていよう。聖人の道を説く場合には、君子は用いない「小説」という形式を採るべきではないと述べるのである。この「小説」には、古文家の儒家的基準から捉えたランクの低いものへの蔑視が伺われよう。

李舟や梁肅など前期古文家が登場する李肇の『唐国史補』の序文に「小説」の語が見える。この書の成立時期は不明である。李肇自身は、憲宗の元和から穆宗の時代にかけて、翰林学士などを歴任した⁽²⁷⁾。序文は次のように記す。

昔、劉餗小説を集め、南北朝を渉りて開元に至り、著はして伝記と為す。予、開元より長慶に至るまで国史補を撰す。史氏或いは闕くるを慮り、則ち補ふの意あり。伝記に続^{つな}ぐも為さざる有り。

これに続けて「報応」「鬼神」「夢卜」「帷箔」に関する記述は退け、「事実を紀し、物理を探り、疑惑を弁じ、勸戒を示し、風俗を採り、談笑を助け」ることを、心がけたと述べている。ここに見える「伝記」とは、前述したように『隋唐嘉話』の異名である『国朝伝記』を指しているが、その命名は、史伝のためのノートという意図によったのである。基本的には、その書の意図を継いで、歴史記録を補うための資料を「小説」という形式で編んだのが、この『唐国史補』だといえよう。ただその内容から排除されるものが、『隋唐嘉話』よりも増え、事実か否かという吟味が厳しさを増している。その結果、報応、鬼神、夢卜に関する記事は、事実ではない（史実とは認められない）として排除を宣言されるのである。前述したように、史学の確立に伴い、その信憑性への疑いを次第に濃厚にされていた、いわゆる志怪領域が、ここにおいて、「史」からの追放を宣言されたともいえよう。目録学の上で、いわゆる志怪書は、『新唐書』芸文志において初めて史部から子部小説家類に移動されたが、中晩唐の交わるこの時期に、⁽²⁸⁾それに通ずる考え方を見出せるのである。

『唐国史補』の内容は、『隋唐嘉話』同様、有名人の言行録が多くを占める一方、下巻など、事物の由来や、当時の制度風俗への言及が見られる。その他、『隋唐嘉話』で指摘した、後の詩話に繋がる文論詩記の数が増えている。これは、李白、王維、張建、顧況などが登場し、彼らに因む話として必然的に詩をめぐる話が記されたのであろう。当時の有名人の資格として、高位高官であることばかりでなく、優れた詩人であることが、この元和年間に成立しているとい

えよう。

また、次のような李肇自身の文学批評の語が見える点も目を引く。

沈既濟枕中記を撰す。莊生寓言の類なり。韓愈毛穎伝を撰す。其の文、尤も高く、史遷に下らず。二篇、真の良史才なり。(巻下、二四四)

現在、伝奇作品と見做されている『枕中記』を、この時期「寓言の類」と捉えていたことは興味深いが、ここでは「小説」という形式を用いて、撰者自身の文学批評を記していることに注目したい。これは、宋代に飛躍的に数を増す筆記小説の芽生えといえないだろうか。「筆記小説」という語も、「二十世紀以降に始めて定着し」⁽²⁹⁾た言葉であり、その概念規定も含めて今後の課題としなければならないが、そこでは朝廷の逸事や有名人の言行録に混在して、書物の備忘録や、先人の著作中の記事を引いてその誤りを正したり、是非を論じたりすることが多くなっている。筆記小説と見做し得る欧陽修の『帰田録』⁽³⁰⁾の後跋が「余の録する所は大低肇を以て法と為す」と記すのも、両書の関連を示唆して興味深い。

以上、この期においては、思想界の活況や所謂伝奇の出現を背景にして、「小説」という形式で記される内容に文学的多様化のきざしが見られること、また、所謂志怪記事が、「史」から追放されたともいえることを明らかにした。

三 宣宗以後の大きな変化

元和の中興を遂げた憲宗が宦官に殺害されて後、唐末に至るまでの唐王朝は、中央は宦官の専横と牛李の党派争い、地方は藩鎮の割拠や農民の暴動に明け暮れ、終末の様相を年とともに呈していった。このような政治状況の中で、士大夫階級を支えてきた既成の価値観が崩壊したであろうことは想像に難くない。頽廢美に溺れるかのような多くの詩、よ

り感覚美に酔うかのような詞の出現、いずれもこの時代状況と無関係ではあるまい。この期に見える「小説」も、このような時代背景とともに考察したい。

明の胡應麟をして、その篇目の難解さを歎かせた段成式の『酉陽雜俎』の序文に「小説」の語が見える。この序の執筆時期は不明である。⁽³¹⁾ 段成式は、咸通四年（八六三）に亡くなっており、今の段階ではそれ以前であるとしきれない。ただ、この序ににじみ出ている屈折した表現からは、その執筆が青年時代とは考え難い。恐らく初老から晩年に近い宣宗の頃ではないだろうか。

この序文は、まず『易』と『詩経』を持ち出し、立派な聖典六経の言も、怪や戯に近いのだから、儒者が筆のすさびに怪や戯を記しても儒家の道を犯すことにはならないと述べる。次いで、経・史・子をそれぞれ御馳走に喩えてほめたあと、御馳走ではあるがゲテモノともいえるふくろうの肉やスッポン料理など、誰も気安く箸をつけるわけがないと述べてから、

固より役めて恥じざるは、抑々志怪小説の書なり。

と記す。ここに見える「小説」とは、また「志怪」との関わりは、如何に解すべきであろうか。三種の読みが可能であろう。その一は、「志怪は小説の書なり」⁽³²⁾。しかし、文の前後から「志怪」を主語と取ることには無理があらう。その二は、「志怪小説」と読み、「志怪」を「小説」の修飾語と見做す捉え方である。その三は、「志怪」「小説」を並列させる捉え方である。二番目は、「志怪の小説」という意味で、現在我々が用いている「志怪小説」と同様の画期的用例といえよう。この可能性も否定できないが、序文中、「怪」と「戯」が二度にわたって対句として用いられており、「怪」―「志怪」、「戯」―「小説」にそれぞれ相当すると考えられる。したがってここでは「志怪」と「小説」とが並列関係に据えられていると見るのが妥当といえるのではないだろうか。もしそうであるなら、ここにおける「小説」は、これま

での質量ともに微細な事実を記す叙述形式から、一つの文学ジャンルを意味する語へと変質したといえよう。また、「志怪」⁽³³⁾も同様に文学ジャンルを意味することになり、「小説」には含まれないが同類と見做されているものと考えられよう。つまり、これまで史的観点からは排除されるべき存在であった「志怪」が、『易』にも「怪」はあるのだからと、やや開き直ったようにはあるが、その存在を認められたのである。ここには、もはや六経の絶対的權威は見られない。時代の混乱によって儒教の厳格な価値体系にひびが入り、その分、「志怪」も「小説」も自由を得たのである。『酉陽雜俎』の内容が、実に多様な要素を含むのも故無しではない。その半ばを占めるのは、事物の由来や博物的要素であるが、「天咫」「怪術」「冥蹟」「諸臯記」などは怪異を記し、「忠志」「語資」などは、有名人の言行録であるが、中には、寧王が娘を救った話など、起承転結を備えた記述も見える。だがそれにもまして注目に値するのは、道教、仏教に関わる記述の多さであろう。「壺史」には多くの道士が登場し、「貝編」「寺塔記」「金剛經鳩異」では、「腹笥三蔵」と自負する成式にふさわしい仏教への傾倒を看取し得る。特に「金剛經鳩異」に収められている再生の冥界譚などの仏教説話や、神仙をめぐる道教説話は、この書と相前後して続出した『玄怪録』『宣室志』『続玄怪録』などに数多く編まれている。したがってここに見える「志怪」「小説」は、当時の傾向を端的に反映した多様性を印象づけるのである。

本書における「小説」の変化は、もう一例において、より顕著である。続集巻四「貶謫」に見える「市人小説」がそれである。ここにおける「小説」は、宋代に盛んになる盛り場の「説話」の初出例として捉えられる。

以上によって、徳宗の頃から芽生え始めた「小説」の変質と多様化が、この時期において明確な形として現われてきたことを証し得たものと思う。

『酉陽雜俎』に続くものは、陸龜蒙の「蟹志」なる文(『全唐文』巻八〇二)である。執筆時期は不明であるが、陸龜蒙自身は、晩唐の懿宗から僖宗時代の人であった。この文では三箇所に「小説」の語が用いられている。

最初は、蟹に関する記述を載せている書物を列挙した上で「小説に蔓延すれども、其（蟹）の智は、則ち未だ聞かざるなり。」と記す。この「小説」は、蟹についての記述を含む文学領域を指しており、直ちに想起されるのは、『酉陽雜俎』『広動植之』二、鱗介篇である。つまり、この「小説」は、それ以前も決して無くはなかったが、『酉陽雜俎』において飛躍的に数を増した博物記述を意味しており、いわば『酉陽雜俎』の後の成立ならではの用例といえよう。

次いで、陸龜蒙は、蟹が義を知り智恵ある生物であることを記した上で、「今の学ぶ者」を次のように批判する。

今の学ぶ者、始めて百家の小説を得て、孟軻・荀・楊氏の道を知らず。或いは之を知るも、又た聖人の言に汲汲とせずして、大中の要を求むるは、何ぞや。百家の小説は、沮洳なり。孟軻・荀・楊氏は、聖人の瀆なり。六籍は、聖人の海なり。

ここにおける「小説」は、「百家」の言説を意味し、「百家の小説」は、儒家的価値観による三つのランクの最下位に置かれている。この「小」の中にこめられた蔑視は、前期古文家柳冕の用例、そして『隋志』『漢志』と遡ることができよう。つまり、この「小説」は、『漢志』以来の儒家の伝統に則った用例といえるのである。

陶淵明に倣ったと思われる自伝「甫里先生伝」（『全唐文』巻八〇一）によれば、彼は好んで古の聖人の書を読み、「六籍を探り、大義を識」ったという。つまりこの文は、彼の基本的価値観に則した見解といえよう。これは、柳冕と同様の復古の立場であるが、彼が当時の官界に背を向けて隱遁生活を送りながら、六籍を学ぶべきだと強く主張する声には、柳冕とは比較にならない危機感がこめられていたであろう。懿宗即位前後の裘甫の乱、その治世半ば過ぎの、龐勳を中心とする戍卒の乱、そして乾符の初めから黄巢が動き出すという時代の混乱を背景に据えると、その混乱による儒学の衰退に対して無為のまま「百家の小説」だけを扱っている、時の学者へのいらだちが明らかになる。ここに見える「小説」は百家の言説を卑しめるために用いられたと解せよう。

以上のように陸龜蒙が用いた「小説」は、『酉陽雜俎』の影響と見られる博物記事を意味する一方、伝統的用例を踏まえながら当時の政治状況を伺わせるニュアンスをも含むのである。

陸龜蒙とほぼ同時代の人と思われる高原休が記した『唐闕史』の序文にも「小説」の語が見える。この序には、中和四年（八八四）の日付が記されており、黄巢の乱によって僖宗が蜀まで逃避行を余儀なくされた時代状況の深刻さも述べられている。その中で彼はこの書を編んだ所以を次のように記す。

武徳貞観より後、筆を吮^なめて、小説・小録・稗史・野史・雜錄・雜紀を為す者多し。貞元・大曆已前は、摺拾して遺事無し。大中・咸道より而下（中略）惜しいかな、方冊に書せず。輒ち従りて之を記す。其の雅^{みやび}に太史氏に登せられし者は、復た載録せず。

「小説」を初めとする六種のジャンルに「史」が二度用いられ、書名の「闕史」及び「太史氏」が載せたものは録さないという言明などから、「史」との関連が『唐国史補』以来、再び見出し出せよう。また、「小録」「雜紀」というジャンル名も、『史通』と重なるものであり、彼の意図としては、史学の流れに組みするものであったろう。だが、内容を見ると、『唐国史補』とは、大いに異なる。同じく有名人に因む逸話も、二百字前後であった李肇の記述に比し、四百字から時には八百字以上と長篇化するのみならず、起承転結を持ったドラマティックなものとなっている。例えば、『復性書』を書いて、程朱思想の先駆と評される李翱⁽³⁵⁾に因む話も、この大儒が、尊大な巫者と対決し、惨敗するに至るまでを活写する。李翱が、孔子の「未だ生を知らず、焉んぞ死を知らんや」を持ち出して彼を責めれば、巫者が阮瞻の無鬼論の破綻⁽³⁶⁾を述べて丁丁発止とやり合う場面、巫者を投獄するとたちまち夫人が病に倒れ、「愛女十人、既に筭して未だ嫁せず、牀を環りて呱呱として泣く」という場面など、大儒李翱の困じ果てた顔が目に浮ぶようである。ここには、李肇に見えた儒学的格式へのこだわりは皆無といえよう。このように「史」との関連を示し、書名にまでそれを冠する

本書において、もはや「小説」は、「史」の従属物ではないことが明らかである。また、当時においては意識されていなかったであろうが、今日的意味での虚構性という要素が、「史」からの脱却を助けているといえよう。

范攄の『雲谿友議』の序には、「小説」の語は無い。だが『漢書』芸文志小説家の語を踏まえて次のように記している。

諺に云ふ、街談巷議も條として王化を裨くる有り。野老の言も聖人採択す。孔子は万国の風謡を聚め、以て其の春秋を成せり。江海は細流を却けず、故に能く之が大を為す。

これによれば、范攄が「小説」を編もうとしたことは明らかである。しかし、この書は序に挙げられた『笑林』や『嘉話録』を初め、その他これまでの小説集とは、印象を異にしている。三巻に分かれたこの書の内容は、雑多な要素を含みつつ、圧倒的に多いのは詩に因む話である。全巻六五則中、詩に関わる話が五三則をも占める。これは、唐といえば詩と称されるほどに空前の活況を呈した詩の情況が、晩唐のこの時期に、「小説」にも波及したと考えられよう。つまり、范攄自身の関心が詩にあったことは当然であろうが、同じく詩をめぐる話が集められた『本事詩』と比べて、この書の目的は、やはり、名士の逸話を集めることであり、当時の名士は、そのまますぐれた詩人であったことにはかならない。著名人の逸話という「小説」の中心要素を視点としながら、背景になる文学状況によって、「小説」の内容が、これまでと様相を異にしたのである。本書において、『隋唐嘉話』『唐国史補』に芽生えていた詩に関する記述が、一つの書物としてまとめ、宋代に流布する詩話の原型ともいえるべき存在に育ったといえよう。

以上のように、少ない資料ではあるが、唐代における「小説」が、『漢書』芸文志以来の伝統を保ちつつも、時代の政治的状況を背景に、史学や、釈道も含めた思想の影響と、詩や所謂伝奇などの文学的影響を受けて多様化していくこ

とを、明らかにした。

注

- (1) 前野直彬「漢代の小説」(『文哲文学会報』第一号、一九七四年十月、のち『中国小説史考』I小説の萌芽、第一章、秋山書店参照。
- (2) 『春秋左氏伝』僖公二八年の伝。
- (3) 『詩経』大雅、生民之什、板第三章。
- (4) 内藤湖南『支那目録学』(『内藤湖南全集』第十二卷所収)「隋書経籍志」によれば、この付注は、恐らく梁の阮孝緒の『七録』に拠ったのであろうと推論されている。
- (5) 経籍志編纂者を魏徵とする説もある。(王重民『中国目録学史論叢』第三章第二節、中華書局 一九八四・十二など)
- (6) 魯迅『中国小説史略』第七篇、裴啓『語林』について述べた語。
- (7) 『旧唐書』経籍志の総序によると、開元九年(七二二)に成った『羣書四部録』二百巻を、この編纂者の一人である毋甕が、四十巻に略した書が『古今書録』であり、恐らく開元年間か遅くとも天宝の初までに成った書であろう。経籍志総序に引かれた『古今書録』の「子録十七家、七百五十三部、一万五千六百三十七巻」という数字は、経籍志内部子録と合致する。
- (8) この点に関しては、霍松林「燕丹子」成書の時代及在我国小説發展史上的地位」(『文学遺産』一九八二・四)が詳しい。
- (9) この点も注(8)の霍氏論文を参考にした。
- (10) 小南一郎「顔之推『冤魂志』をめぐる」(『東方学』第六五輯、一九八三・一)に見える見解。
- (11) 撰者名を孔思尚と記す。『太平御覧』卷四一四孝下に二条収められている。
- (12) 撰者は陽松玠と記され、『崇文総目』小説家に「八巻」、『直齋書録解題』伝記類に「二巻」として著録されている。姚振宗は『解頤』の条に「解頤は即ち談藪の異名」とするが、その当否については、いま論じない。

唐代における「小説」の変容について

- (13) 『全唐文』巻四〇三によれば「天宝の時、書判拔萃科に擢せらる」と記される。
- (14) 『新唐書』芸文志には、劉餗の著作として『国朝伝記』一二巻(雜伝記類)、『伝記』三巻一作『国史異纂』(小説家類)、『梁府古題解』一卷、『史例』三巻(総集類)が著録されているが、『隋唐嘉話』の名が見えない。『隋唐嘉話』は『直齋書録解題』巻十一小説家類に『劉餗小説』三巻と並んで一巻として著録されている。だが、各テキストや佚文の校勘の結果、程毅中氏は、『今本《隋唐嘉話》、実即《伝記》(亦即《国史異纂》)及《小説》的異名』とする。(中華書局、一九七八・五刊『隋唐嘉話』点校説明)。
- (15) 十四条のうち、阮閱『詩話総龜』に五条引かれている。巻上1、5、巻中62、72、98(数字は、中華書局刊前掲書の通し番号。以下、同じ。)十四条は補遺中の一条も含む。
- (16) 郁賢皓『唐刺史考』(江蘇古籍出版社、一九八七・二刊)によれば、李舟が虔州刺史であったのは、貞元年間とされる。この説が正しければ、序文が書かれたのは梁肅が編んだ時期より八年以降のことになり、韓愈の活躍した時代に更に近づくことになる。
- (17) 享年五三歳(『新唐書』巻一六二)。なお独孤及の世系、事蹟については、羅聯添「独孤及考証」(『大陸雜誌』四八一三、一九七四・三)参照。
- (18) 林田慎之助「唐代古文運動の形成過程」(『日本中国学会報』第二九集、一九七七)。韓愈との関係を人脈・年代別に図示整理され、独孤及たちを第一次古文家集団、韓会・梁肅たちを第二次古文家集団に分類される。李舟は第二次に属すだろう。
- (19) 『旧唐書』巻一六〇韓愈伝、『唐摭言』巻七知己。神田喜一郎「梁肅年譜」(『東方学会創立二十五年記念東方学論集』一九七二)。
- (20) 李舟の文は、『全唐文』巻四四三にこの書も含めて七篇収められている。その他『唐国史補』巻上59、巻下57、69、『唐摭言』巻四師友に逸話が見えるが、その文学思想的立場は不明。
- (21) 劉三富「独孤及の文学について」(『九州大学中国文学論集』一九七六)。

(22) 神田喜一郎氏前掲論文。

(23) 同右。

(24) 狩野直喜『中国哲学史』第四編 第四章第二節(岩波書店、一九五三・十二)。

(25) 宇文生とは、韓愈と『順宗実録』を編んだ宇文籍(七七一一八二九)と考えられるが、孟判官は未詳。

(26) 孫昌武『唐代古文運動通論』第四章(百花文芸出版社、一九八四・四)。

(27) 李肇の略歴は、『全唐文』卷七二一、『旧唐書』卷一七一など。

(28) 五代に成った『旧経』は、前述のように開元年間の『古今書録』をほぼそのまま踏襲しているので、『旧経』において志怪書が史部に著録されていることは、この時期における「史」からの追放に矛盾しない。

(29) 中国文化叢書⑤『文学史』Ⅷ4、入矢義高氏執筆。

(30) 『帰田録』の内容には、楊億を「真に一代の文豪なり」と評する語が見えるが、文学批評の語はそう多くなく、朝廷の逸事が多い。

(31) 『酉陽雜俎』の記述中、最も遅い年号は、前集では、「開成末」(卷四 物革、卷十五諸臯記)、続集では、「宣宗大中七年」(卷五 寺塔記 上)(方南生点校、中華書局、一九八一・十二刊本に拠る)。

(32) 今村与志雄訳(『東洋文庫』平凡社)は、こう読む。

(33) 初出例は、『莊子』逍遙遊の「齊諧なる者は怪を志る者なり」。その後『隋志』には「志怪」を書名とする二書、『志怪記』と称する一書が著録されるが、作者の一人祖台之の伝に「志怪書を撰し、世に行はる」(『晋書』卷七五)と見える。この「志怪書」は、怪異を記した書物という意味であろう。

(34) 陸龜蒙の本伝は『新唐書』卷一九六、隱逸伝。

(35) 「李文公夜醮」と題す(卷上)。

(36) 『幽明録』第六八条(『古小説鉤沈』所収)。

唐代における「小説」の変容について

(37) この書は南宋にすでに二種通行していた(『四庫全書総目提要』子部小説家類一)。現在四部叢刊に三卷、『稗海』などには十二卷収められる。本稿は前者に拠る。

(38) 佐藤保「唐代の〈詩話〉—〈本事詩〉ノート」(『中国文学研究』四、一九六六・十二) 参照。

(39) 今回の調査の対象は以下の如くである。

○『文苑英華』卷三五一—卷三七九雜文、卷六六七—卷六九三書、卷六九九—卷七三八序、卷七三九—卷七六〇論、卷七六一—卷七七〇議、卷七九二—卷七九六伝、卷七九七—卷八三四記。

○以下はすべて『叢書集成』新編収録の書。『求心録』『海山記』『煬帝開河記』『煬帝迷樓記』『高力士外伝』『裴仙先別伝』『隋遺録』『教坊記』『孫内翰北里誌』『妝樓記』『大唐新語』『松牕雜錄』『隋唐嘉話』『唐国史補』『明皇雜錄』『開天伝信記』『朝野僉載』『昌黎雜説』『劉賓客嘉話錄』『因話錄』『乾腰子』『雲谿友議』『劇談錄』『幽間鼓吹』『杜陽雜編』『桂苑叢談』『雲仙雜記』『独異志』『灌畦暇語』『玉泉子』『唐闕史』『順宗実録』『卓異記』『次柳氏旧聞』『東觀奏記』『奉天録』。

〔附記〕

脱稿後、程毅中「論唐代小説的演進之迹」(『文学遺産』一九八七年第五期)を読んだ。見解は拙論と多少異なるが、同種の問題を扱っており、拙論の資料と一部重複するところがある。